

研究実践報告書

自他の思いや考えを大切にし、積極的に伝え合おうとする子どもの育成

～「聞く視点」を持って伝える数学的活動を通して～

学校名：大分市立城南小学校

氏 名：伊藤 和海 教諭

1. 研究主題

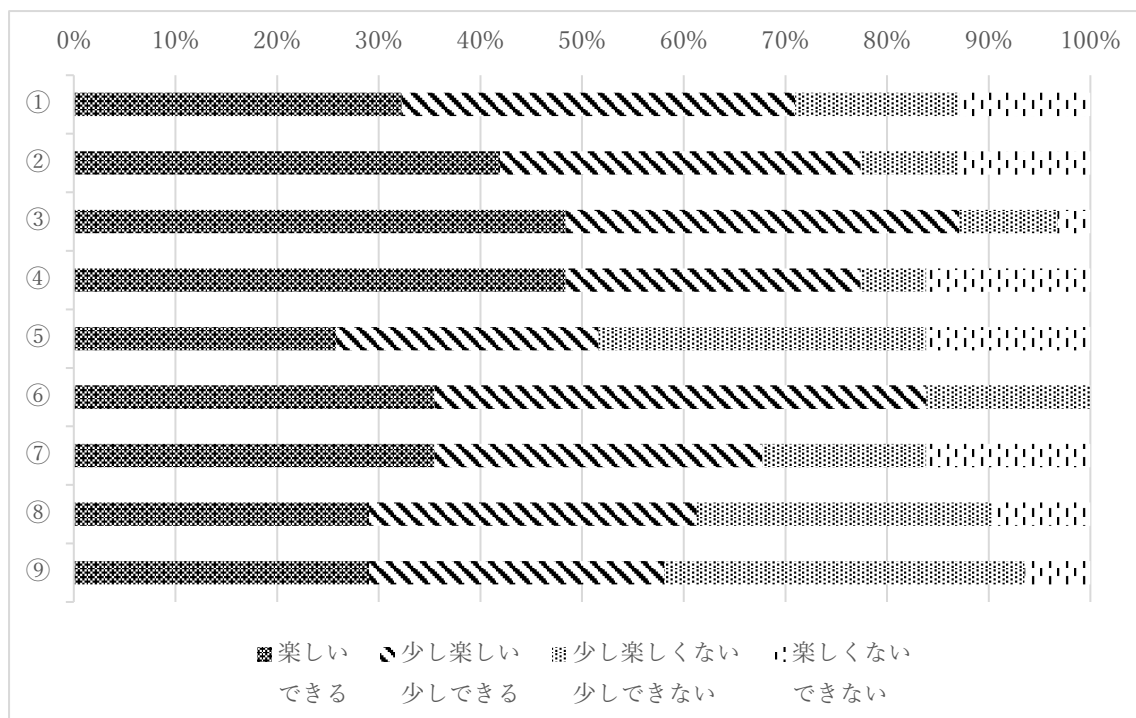
自他の思いや考えを大切にし、積極的に伝え合おうとする子どもの育成
～「聞く視点」を持って伝える数学的活動を通して～

2. 主題設定の理由

学習指導要領の改訂が行われたことは記憶に新しく、それに伴い小学校現場では本年度から先行実施されている。全面的に実施されるのは、東京オリンピックが開催される32年度からである。私たち教師は、学習指導要領改訂のねらいや基本的な考え方を適切に捉え、子どもたちがこれからの未来社会を切り拓いていくための資質・能力を育成していく必要性が高まっている。文部科学省の考え方によると、知識及び技能の習得と、思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視したこれまでの学習指導要領の教育内容は維持し、「知識の理解の質」を高めることが本改訂の1つのポイントとして挙げられている。そのために新たに掲げられたのが「主体的・対話的で深い学び」である。そこで本研究では、「主体的」と「対話的」という言葉に焦点をあて、算数科における深い学びにつなげるための効果的な手立てを見出すことを目的として行う。

また、算数科改訂の基本方針の3項に「言葉や数、式、図、表、グラフなどの相互の関連を理解し、それらを適切に用いて問題を解決したり、自分の考えを分かりやすく説明したり、互いに自分の考えを表現し伝え合ったりすることなどの指導を充実する。」とあることからわかるように、知識と技能の習得に加えて、それらを他者に向けて分かりやすく説明したり、考えを伝え合ったりする姿が求められている。このように、ペアでの対話や、全体での交流を通して、「深い学び」に繋げられるのが算数科の特性である。研究を行う上で、学級の実態に即した研究にするため、4月に算数学習アンケートを実施した。下記の表・グラフはその結果を示すものである。

		楽しい できる	少し楽しい 少しできる	少し楽しくない 少しできない	楽しくない できない
①	算数の授業は楽しい。	10	12	5	4
②	みんなで考えたいこと（課題）を見つける。	13	11	3	4
③	自分の考えを式や図、キーワードなどを使って、ノートに書く。	15	12	3	1
④	自分の考えをペアやグループの友だちに話す。	15	9	2	5
⑤	自分の考えを全体の前で話す。	8	8	10	5
⑥	自分の考えと似ているところや違うところはどこかを考えたり考えの良さを見つけたりしながら友だちの話を聞く。	11	15	5	0
⑦	自分の考えを式や図、言葉などを使って工夫して説明する。	11	10	5	5
⑧	友だちの考えとつないで自分の考えを話す。	9	10	9	3
⑨	友だちの考えを聞いて、質問したり感想を言ったりする。	9	9	11	2



アンケートの結果と、日常の学級の様子から大きく2つの課題が見えてきた。1つ目は、自分の考えをペアの友だちに話すことはできるが、自分の考えを伝えっぱなしで終わっていたり、全体の前で話すことに苦手意識をもっていたりする子どもが多いということである。2つ目は、友達の考えを聞いたうえで自分の考えとつなげたり、聞き返しをしたりする活動の充実である。子どもたちの中で、全体交流の場では、問いに対する正解を導き出さなければならないという意識が強い。そのため、考えを伝えることができる子が限られていることが学級の実態としてある。同時に、聞く意識にも子どもたちによって差があることが見えてきた。自分と違う考えから新たな着想を得たり、比較することでより良い答えの導き方を追求したりしていくことに意識を向けることで、より効果的な伝え合いの活動に繋がると考える。そこで本研究では、算数科における伝え合いの活動の充実をねらいとした、「聞く視点の持たせ方」を研究の中心として設定し、問題場面を必要に応じて図に表して考えようとする力や、言葉や式、図等の数学的な表現を使って説明する力の育成へとつなげていきたい。

3. 研究仮説

問題解決の方法を考え合う数学的活動において、聞く視点の持たせ方を工夫すれば、自他の思いや考えを大切に、積極的に伝え合おうとする子どもが育つであろう。

4. 研究内容・方法

(1) 研究主題の捉え方

「自他の思いや考えを大切にし、積極的に伝え合おうとする子どもの育成」



大分市立城南小学校では、「聞く視点」を効果的に伝え合いに生かすための研究実践に取り組んでいる。そこで本研究では、城南小学校における「聞く視点」のとらえ方に則り、授業実践を行う。以下は、平成29・30年度大分市立城南小学校研究紀要、2年次研究における、「聞く視点」に関する定義の概要である。

「聞く視点」とは、友だちの意見をどの部分に着目して考えるのか、というような1つの意見に対する“考える視点”を持つこととして捉える。他者の意見に対して視点を持って聞くことで、1つの考えに全員が関わり、そこから新たな疑問やつながった発言が生まれ、深い学びに繋げることができる。そこで、聞く視点を持たせるために必要なものを大きく3つに分けて考える。

「聞く視点」3観点のとらえ方

【1】聞く必要感・・・考える必要感 「え?」「なんで?」「どういうこと?」
課題意識→考えることの焦点化→聞く視点

【2】自分の考えとの違いに気づく・・・式の違い、図の違い、考え方の違い
これに気づくためには自分の考えの書かせ方の工夫が必要である。
自分の考えの根拠となる図や数の意味、考え方などのキーワードを思考させる。

【3】具体的な聞く視点・聞かせ方・・・何に着目すればよいのか。
子どもたちが自ら聞く視点を持つことは難しい。
→教師の出番が必要
・話し合いの焦点化（立ち止まり）
・考えの聞かせ方（再現・確認・他者説明・ねらいのあるペア対話、聞き取ったことを書かせるなど）

このことから、聞く視点の持たせ方の工夫として以下の3つに焦点を当て考える。

- 「聞く必要感」の持てる課題設定
- 「聞く視点」が持てる考えの書かせ方
- 「聞く視点」を持たせる教師の出番

上記の3つの聞く視点を子どもにもたせることで、主体的・対話的な学びにつながり、深い学びを実現することができると思う。

(2) 研究実践

3つの聞く視点の持たせ方の工夫を取り入れた指導案による授業を行い成果と課題を検証する。
またその時の子どもたちのペア・全体での発言や、ノート・ホワイトボードを記録しておき、考えの
移り変わりの様子を検証する。

(3) 検証方法

3つの聞く視点の持たせ方の工夫を取り入れた検証授業を、11月16日に行う。授業の最後に
本時の振り返りを記入させ、本時の学習について自己評価を行い、授業後の子どもたちの変容を読み
取るとともに、聞く視点を持たせたことによる効果や改善点を、参観者によるアンケートをもとに考
察する。

「聞く視点」3観点につながる評価項目として、

- 【1】考える必要感を感じながら、課題意識を持って授業に取り組めたか。
＜「聞く必要感」の持てる課題設定＞

【2】根拠となる図や数の意味、考え方について思考し、自分の考えを書けたか。
＜「聞く視点」が持てる考えの書かせ方＞

【3】何に着目して考えればよいかを明確にし、伝え合いに生かすことができたか。
＜「聞く視点」を持たせる教師の出番＞

の3つの項目に関連した変容を抽出し、考察する。また、12月上旬に再び算数アンケートを行い、
子どもたちの意識の変容を検証する。

5. 研究の実際と考察

(1) 実践内容

算数の授業では、本校の研究に基づき「つなげて話そうカード」「ペアトークの約束」をノートの
裏表紙に貼り、伝え合いを意識させて授業を行っている。本研究では、第6学年の「比」の単元
における学習指導を通して、3つの聞く視点の持たせ方の工夫を取り入れた授業を行った。

以下はその概要である。

※本時の学習指導案、具体的な実践内容は別紙資料参照

単元名 : 比

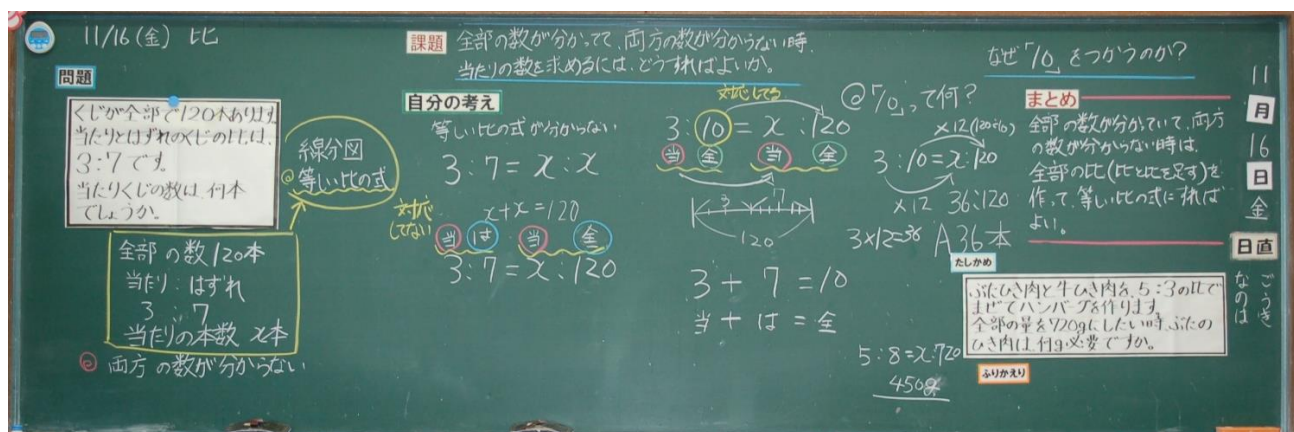
単元目標 : ○比の意味と表し方を理解する。

○比の相等について理解し、比の性質を用いて、問題を解決することができる。

【伝え合い】友だちの考えとの共通点や相違点に気づき、良さを見つけながら考えを聞き、自分の思
いや考えを、線分図や式、よりよい言葉を使って、相手に分かりやすく伝えることがで
きる。

主眼 : 比と全体の数量から部分の数量を求める方法を7と10の違いを線分図を使って話し合
うことで考え、全体の数量に対応する比をつくって等しい比の式に表せばよいことを理
解することができる。

《最終板書》



《本時で取り入れた「聞く視点」の持たせ方の工夫》

＜「聞く視点」がもてる課題設定の工夫＞

本時では前時と同じく、具体的な場面として「くじ引き」を想定し、全体の量である120個と、当たりとはずれの比である「3:7」が分かっている時に、当たりの数を求める問題である。導入で子どもに実際のくじを引かせることで、なかなか当たりがでないことから「今回の比はどうなっているのか」というつぶやきを拾い、問題を提示する。「前時と何が違うか」と問うことで、前時では2つの数量を表した比と、どちらか一方の部分量が分かっていたのに対し、本時ではどちらの部分量も分かっていない代わりに、全体量が分かっていることに気づかせ、比と全体量を使って当たりくじの数を求める課題を設定する。

＜「聞く視点」がもてる自分の考えのかかせ方の工夫＞

既習内容である「等しい比」が使えるという見通しをもたせ、自分の考えを、言葉や式、図等を使ってノートにかかせる。その際、自分の考えがもてない子どもには、線分図やキーワード（「全部の比」、「当たり:全体」等）を記した補助プリントを準備しておき、必要に応じて使わせる。またペアトークや全体の場での説明を意識させてかき方を工夫させる。考える中で、困りがある場合は、自分が何に困っているのかをできるだけ明確にし、伝えられるように準備させておく。

＜「聞く視点」をもたせる教師の出番＞

全体の中ではまず、困りを先に取り上げる。困りを話し合う中で、「120」に対応する比は「7」ではなく、「10」であることに気づかせていく。その際、聞く視点を明確にしながら問い返したり、再現させたり、リレー説明をさせたりして、複数の子どもに説明させていく。全体量に対応する比が必要であることを理解したら、学習をまとめるために再度「なぜ10を使うのか」を問い、理解できているかどうかペアトークをさせることで、「全部の数に対応する比を使わなければいけない」ということを全員で確認したい。

《授業記録》

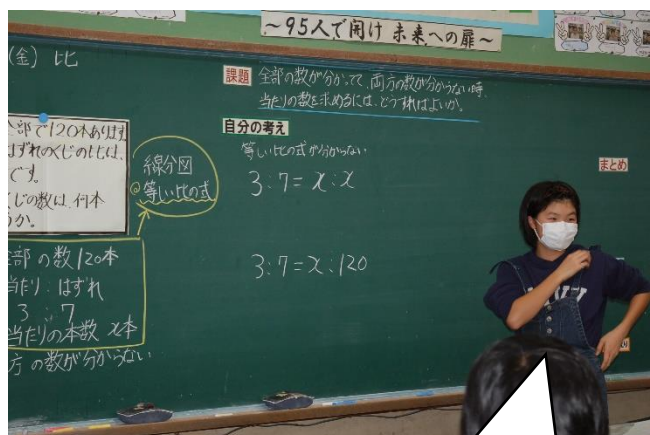
※教師、児童の発言記録は別紙を参照



困りを言う子ども
「等しい比にした時に、 $3:7=X:X$ のように、どちらも分からない式になってしまう。」



なぜ $3:7=X:120$ ではだめなのか
「できそうだけど、 $3:7$ は当たり：はずれなのに、 120 は全体だから、比が対応していない！」



伝え合いの約束
「説明します。」→「はいどうぞ」
「ここまでよいですか？」→「うん」
必ず反応させる



数直線を使って説明する子ども
「 $3:7$ を線分図で書いてみると、ここが $3:7$ で、合わせると 10 になるから、これが 120 と対応してる。」

(2) 検証授業の考察

《参観者のアンケートまとめ》 ＊は中学校参加者

＊学級経営がすばらしい。この一言につきます。授業前から、今日の授業はよいものになると感じました。授業もとても素晴らしかったし（算数的に小さな指摘はあると思いますが）三年目と聞いてびっくりしました。次の学校にいても、この城南小の研修をベースにしてがんばられてください。研究内容も先生の授業も最高でした。

＊「今日は何を解決したいですか」という問いかけ、前回の学習内容を活用した流れ、班の中で考えたことを伝え合う場面、「困っていること」の整理・明確化、「これでできるんじゃないの？だめなの？」という揺さぶり、児童の発言や説明をもとに解決に向かっていく道筋、一人の児童の説明に終わらず、他の児童にも説明を求める場面等々の手立てが大変有効だと思いました。

・視点を絞ったことで「全員がかかわって思考する」ことができていたと思います。ペアトークも活発で普段からしっかり取り組まれているのだなと感じました。困りを表出できる学級経営が素晴らしいのだなと思いました。

・6年生の子どもたちが心も頭脳もしっかり育っていて、受容的でみんなで課題を解決しようとする姿がすばらしかった。日頃の積み重ねがあちこちに出ていい授業だった。授業者はもちろんのこと、学年部のみなさんの努力に頭が下がります。学ぶことが多かったです。

・授業の中で子ども発言に「あー」「なるほど」のつぶやきが聞かれました。練り合いができていたと思います。主体的・対話的な学びがあったと思います。ありがとうございます。

・学級経営による雰囲気の良いさ、挙手数の多さを感じました。学ばせて頂きありがとうございます。

・とても伝え合う姿が見られてよかったです。日頃の研究の成果が出ていて勉強になりました。

・意欲的に話し合う姿がすばらしかったです。先生方のあたたかい指導のおかげだと思います。

・ペアトークがよかった。子どもたちが一生懸命伝え合おうとする姿が見れた。導入のくじ引き、実際にやったのが良かった。テンポがいい。クラスの雰囲気が良かった。意欲的で素晴らしい。

・学級経営そのものが見て取れる。子ども一人一人の考えを表現するのに、教師がつなげる、子どもがつなげる姿が見られる。子どもたちの成長を促していると感じた。伝え合う、つなぐ時に、子どもの考えの位置付けとをハッキリさせていながら、思考の交流、深まりと共に子どもの考えの変容が見て取れる板書の工夫をしていると思う。

・「1つの考えに関わって」・・・焦点化することで同じことについて話し合う姿が見られた。全ての子が積極的だった。

・はじめに考えることを全員で統一し、どの子も問題を解決するために積極的に発表していました。先生はほとんど解決法を投げかけず、あくまでも「どうすればいい？」「これって何？」などの適切な声かけをすることで、子どもたちは楽しく考えることができていたと思います。すばらしい授業でした。

・ペアトークで語り合う姿、「分からない」と手を挙げて主張する姿、説明をする子どもが続く姿が見られた。1つに絞って考えるということは、今回は、等しい比の式に絞らず、線分図も使って考えた方が、子どもが意欲的に伝え合うことができたのではないかと思います。

《本時の成果と課題》

○「聞く必要感」の持てる課題設定

本時で分かっていることを整理し、前時と違うところはどこかと問うことで、本時で解決すべきポイントについて共通意識を持つことができた。そこから課題を子どもから引き出し、スムーズに設定できたことにつながった。その際、前時に引き続き、実際のくじを子どもにひかせながら問題を提示しておくことで、子どもの「解決したい」という意欲をひきだすことができた。

事後研修の中で、より子ども主体で課題設定につなげる手立てとして、問題を提示した後に子どもに解かせることも挙げられた。そこで「やってみる」→「困る」→「何が原因なのか」という、子どもの中に生じる自然な思考を取り上げて、課題設定へとつなげることも方法の一つであると考えられる。

○「聞く視点」が持てる考えの書かせ方

本時の問題を解決する時に使えるものとして、全部の数「120」を10等分して、3個分を求める方法や、比の値を使う方法などもあったが、今回は自分の考えを子どもに書かせる前に、「今日は等しい比を使ってこの問題を解いてみよう」となげかけ、考える視点を「等しい比」に焦点化した。そうすることで、1つの考えに対して全員が関わって思考する場が生まれ、対話的な学びへの一定の効果が得られた。

子どもの振り返りの言葉から、自分の考えを書く前は、等しい比ではなく、全部の数「120」を10等分して、3個分を求める方法で解こうとする児童が複数いたことがわかった。その中で、聞く視点を等しい比にしぼる流れであったため、そこに必然性を持たせる展開の工夫が必要である。今回は「前回の考え方で便利なものがあつたよね？」という問いかけから、等しい比を使う流れへとつなげたが、子どもの思考に、より自然な流れで自分の考えを書く活動につなげられる工夫が課題として残った。

○「聞く視点」を持たせる教師の出番

「聞く視点」を等しい比にしぼることで、誰かの意見が黒板に提示された時に、複数の児童から「あー」や「なるほど」などの反応があつた。全体交流の中でこのようなつぶやきが出てきた時に、それらの発言を取り上げ、「なんで？」や「どういうこと？」と問い返すことで、他者説明する場を作ることができた。本時では、「3:10=X:120」の考えが出た時に、問題文にない「10」が出てきたことに対する疑問が出てくることが予想された。そこで「何か疑問がある人？」と投げかけることで、「10」という数字の正体を明らかにすることが、今日の課題の解決へとつながるという共通意識を持たせることができた。大切なポイントを一人の説明に終わらず、違う言葉で何回も説明を聞いたり、再現のペアトークを取り入れることで、子ども全員の理解へとつなげることができたと考える。

本時で新たに分かった考え方が、確かに子どもに身についているかを、授業の中で意識しておくことが大切である。そのために、「たしかめ問題」のさせ方に工夫の余地が考えられる。例えば今回の場合は、たしかめ問題をノートに解いた後、その考え方を再度ペアトークで説明する方法が考えられる。たしかめ問題を解くことができ、それを他者に説明できることで、分かったことの実感をより得ることができると考えた。

「比を対応させた式を作る」ということを全員に気づかせたい。→他者説明を繰り返す。

文題は 10%で何?

$10 = X : 120$

$3 : 10 = X : 120$

$36 : 120$

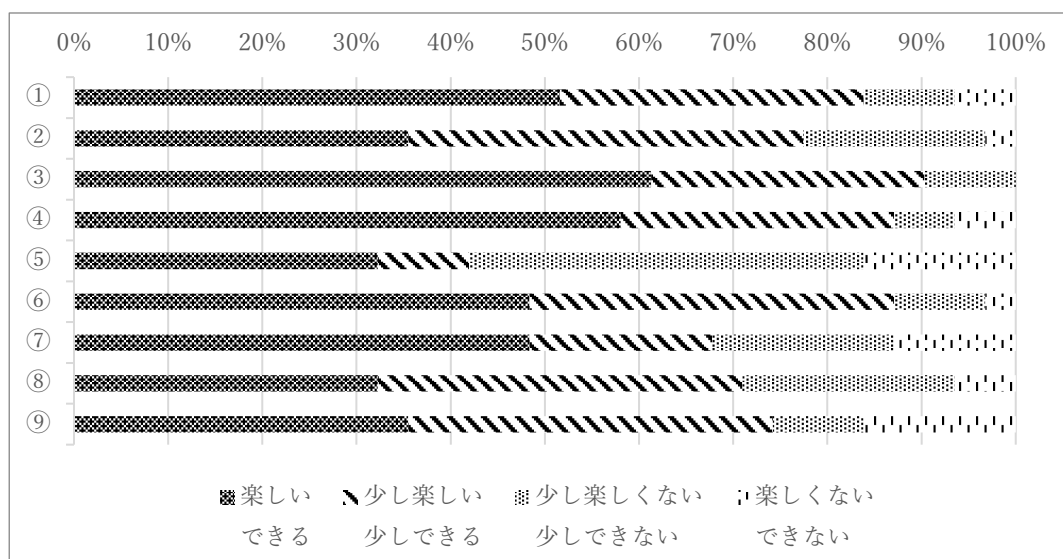
$3 \times 12 = 36$ A 36本

「10」について、
みんなで考える

6. 研究の成果と課題

(1) 算数学習アンケートから (11月下旬に実施)

		楽しい できる	少し楽しい 少しできる	少し楽しくない 少しできない	楽しくない できない
①	算数の授業は楽しい。	16	10	3	2
②	みんなで考えたいこと(課題)を見つける。	11	13	6	1
③	自分の考えを式や図、キーワードなどを使って、ノートに書く。	19	9	3	0
④	自分の考えをペアやグループの友だちに話す。	18	9	2	2
⑤	自分の考えを全体の前で話す。	10	3	13	5
⑥	自分の考えと似ているところや違うところはどこかを考えたり考えの良さを見つけたりしながら友だちの話を聞く。	15	12	3	1
⑦	自分の考えを式や図、言葉などを使って工夫して説明する。	15	6	6	4
⑧	友だちの考えとつないで自分の考えを話す。	10	12	7	2
⑨	友だちの考えを聞いて、質問したり感想を言ったりする。	11	12	3	5



1 1月下旬に再び算数アンケートを行った。著しい変化が見られた主な質問項目は、

①算数の授業は楽しいですか。

楽しい・少し楽しい…26人 (72%→84%に増加)

④自分の考えをペアやグループの友だちに話せますか。

できる・少しできる…27人 (77%→87%に増加)

⑧友だちの考えとつないで、自分の考えを話すことができますか。

できる・少しできる…22人 (62%→72%に増加)

⑤自分の考えを、全体の前で話せますか。

できる・少しできる…13人 (52%→42%に減少)

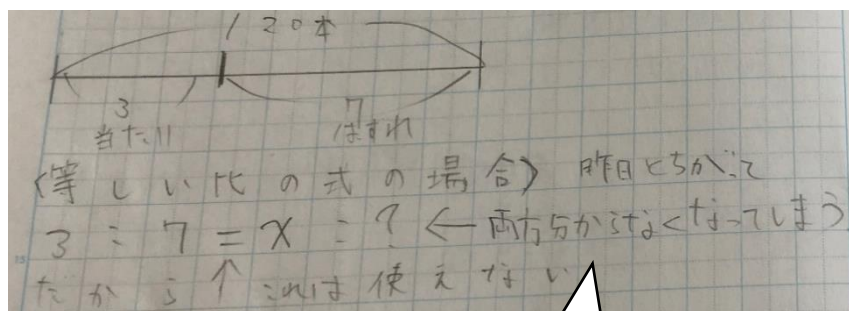
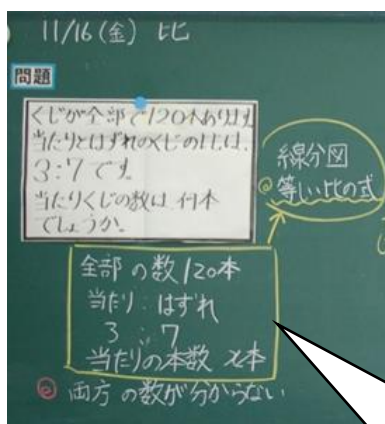
の4項目である。

<成果>

①ペアトークで自分の考えを伝えることができる子どもの増加

ペアトークでの伝え合いが活発に行われるようになった。その要因として、自分の考えを明確に持てる子が増加したことや、「子ども主体による課題設定」、「考える視点の焦点化」の流れが定着してきていることが考えられる。本時の問題を提示する際、必ずこれまでの学習と異なっている所や、聞き方の違いに着目し、「これまでと何が違うか」を整理する活動を取り入れた授業を行ってきた。また、それらを板書にも記し、「何を解決したい？」という発問から本時の課題に繋げるようにした。課題を全員で共通理解しておくことで、毎時間ごとに考える視点を焦点化することにつながったと考えられる。

また、自分の考えが持てずに困っている子に対しては、「何がわからないのか」や「何に困っているのか」をノートに書けばよいということを伝えてきた。そうすることで、解決にまで至っていない子ども、ペアトークで“困り”を伝えられる子が増えたことも、ペアトークが活発になった要因の1つであると考えられる。



分かっていること、これまでと違う事を整理し、板書に示す。

何が原因で困っているのかをノートに書く

②友だちの考えとつなげた説明活動の充実

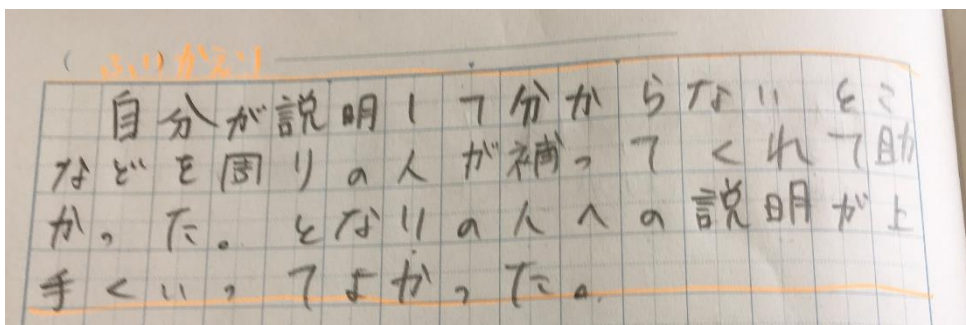
1時間の授業の中でペアトークの時間を3回以上とるようにした。1回目は自分の考えを伝える場をつくり、つなげて説明したり質問したりすることで、考えの異同を捉え、反応する力を育てることを目的として行った。また授業の中で1人の考えが周囲に上手く伝わっていない時に（意味を理解していない反応が多い場合）他の児童に同じ内容の説明をさせたり（補足、再現）、ペアにもどして、再度話し合わせたりする活動を取り入れた。1つの意見に全員が関わって伝え合う活動は、子ども同士の説明活動を充実させることに一定の効果を得られたと考える。

<課題>

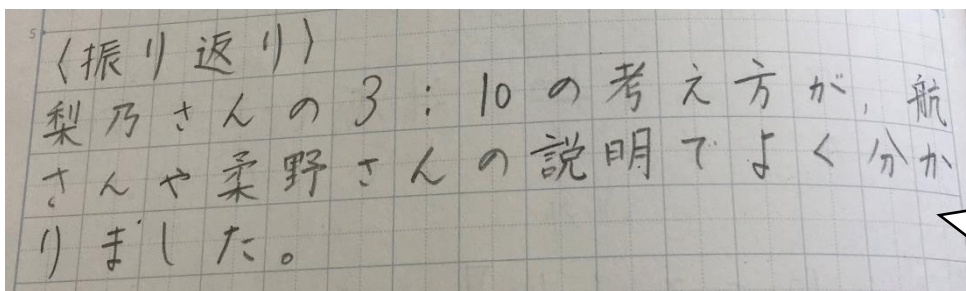
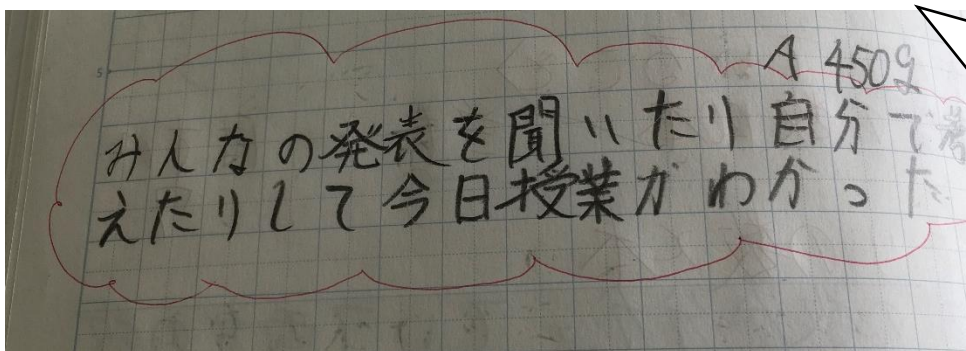
ペアでの伝え合いが活発になった一方で、全体交流の場で自分の考えを伝えることに対して、抵抗を感じている児童が18人と、増えていることが明らかとなった。全く発表をしない子どもをどのようにして全体の場に参加させるかが課題である。学年があがるにつれて、間違えることを恐れたり、恥ずかしいと感じたりする子どもは一定数存在する。しかし本研究を通して、子どもから出る困りを全体で共有することができれば、解決への大きな意欲付けにつながることも明らかとなった。「発表」という形にとらわれず、様々な立場の子どもが、全体の場で考えを伝えられる授業形態の工夫を考えていく必要がある。

(2) 子どものふりかえりから

《伝え合うことの良さを実感している子》・・・11人



1人の考えについて周りで言葉を補いながら、全員の理解につなげられる。



他者説明による理解の深まりを実感

《始めにあった困りから、解決へつながったと実感している子》・・・11人

ふり返り
はじめは等しい比の式がつかれな
くてこまっていたけど意見をきい
てよくわかった。その後は等しい
比の式をつくれたからよかった。

「わからない」
「困り」がある。



友だちの考えを聞こ
うとする意欲

「ふりかえり」
今日はお客さんがきていて
きんちうしそうだった。
問題は最初^①え^②てかんじだ
たけど最後は^③スッキリした。
わかると比は簡単だな〜と
思う。

《本時で新たに学んだことを実感している子》・・・9人

ふり返り
比の数と全体の数しかわからなくて
比の数と全体の割合：全体の割合
を使、た等しい比の式を使えば簡
単にわかる。

本時の問題で身につ
けた考え方を、振り
返ることで再現して
いる。



考え方の定着

ふり返り
両方の数がわからないときには、
全部を比をつくらせて、等しい比の
式にすればよいことがよくわか
た。あと、くわのもえさんの説明
が、とてもよかった。

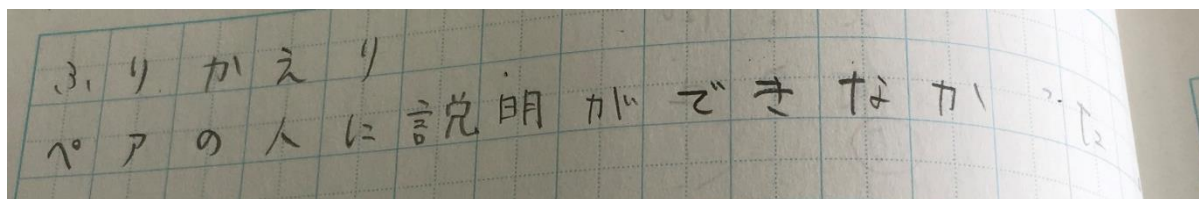
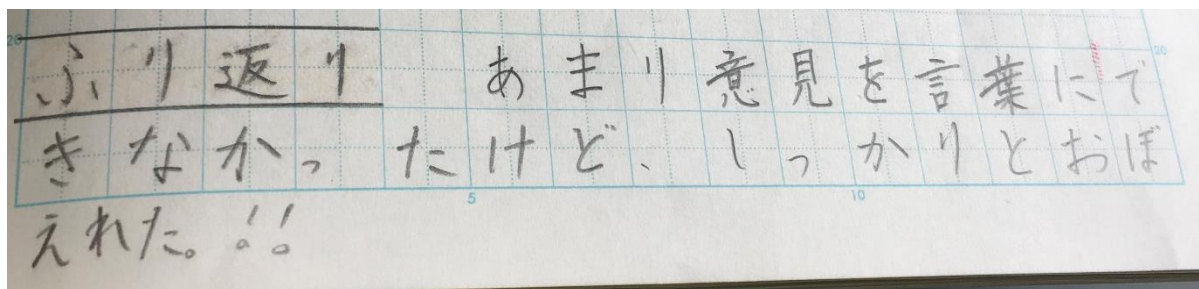
<成果>

ふり返りから、子ども同士の説明活動により、学習理解につながったと実感した子どもが多くいることがわかった。自分の考えを書くときに、全体で困りを共有することにより、解決への意欲付けにつながったと考えられる。また困りを1人にだけ言わせるのではなく、同じ困りを持つ人を紹介したり、「この困りの気持ちがわかる？」と問いかけたりすることで、全員が同じ土俵に立って考えることができた。そのことが、後の全体交流の場で、子ども同士で説明する時の、言葉の選び方や図の使い方の意識づけにつながり、聞く側にとっても困りの解決に向けて注意して聞こうとする姿勢につながった。授業の中での困りが、子ども達にとっての聞く視点となり、積極的な伝え合いへの一定の効果が得られたと考える。

また、本研究では1時間の授業の中で、ペアトークを3回以上取り入れることを意識して行った。それぞれに異なった目的を持たせており、1回目は先述の通り、自分の考えを伝える場をつくり、つなげて説明したり質問したりすることで、考えの異同を捉え、反応する力を育てる、2回目は授業の展開に応じて、友だちの考えを確認したり、再現したりする等、焦点化されてきた考えを全員で理解する、3回目は深める問いに対して行い、本時で学習したことの良さについて考え、まとめにつなげる、である。ふり返りから、授業の中で必ず全員が発言する場を保障することで、学習したことを自分の言葉で表出し、より確かな理解へとつながったことが考えられる。

<課題>

ふり返りの中で、一部、伝え合いに対して不足感を抱いている子がいたことがわかった。また、「伝え合うことの良さを実感している子」11人の内容を見ても、説明を聞く側の良さを書いている子が多く見られたことから、伝える側の子が、固定化してきているということが考えられる。本研究で明らかとなった、伝え合いながら解決していくことの良さを維持しつつ、リレー説明や問い返し等、多様なねらいのペアトークを取り入れていくことで、ペアで発言する機会を増やしていく必要があることがわかった。



7. 研究のまとめ

今回の研究では、算数科の授業を通して、積極的に思いや考えを伝えようとする子どもの育成に向けて、「聞く必要感」の持てる課題設定、「聞く視点」が持てる考えの書かせ方、「聞く視点」を持たせる教師の出番、の3つの観点から授業づくりの工夫を研究してきた。研究主題である「自他の思いや考えを大切に、積極的に伝え合おうとする子どもの育成」に向けて、明らかとなったことは、①「困り」を共有したことによる解決意欲の高まり、②考える視点をしばったことによる、全員が関わった対話的な学び、③目的を持たせたペアトークと複数の他者説明による、学習内容の定着力、である。検証授業の中で、子ども達の「説明したい」という欲求が瞬間的に大いに高まった場面が2つある。1つ目は、「困っていること」を整理する際、「これでできるんじゃないの？だめなの？」という揺さぶりをかけた場面と、2つ目は、問題文に無い「10」という数字が出てきた際、「10って何？」と全員に着目させた場面である。教師が解決法を投げかけず、あくまで子ども達の説明を中心とすることで、主体的な学びに向けて、一定の効果が得られた瞬間であった。また検証授業での参観者のアンケートにもあるように、伝え合いの意識や考えの書かせ方で、子どもたちの意欲的な姿が見られたのには、日々の授業での積み重ねによるものが大きい。教師の発問とそれに対する子どもの反応や動きに目を向け、日々の授業の中で研究を継続していくことが大切である。この研究が達成地点ではなく、より効果的に伝え合う姿につなげるための1つの振り返る視点とし、今後の授業力の向上へと努めていきたい。

